

鯀沢雪の夜嘯（小室山の御封、玉子酒、熊の膏藥）

三遊亭円朝

青空文庫

これは三題だばなし噺でございます。○「ひどく降ふるな、久ひさしいあとに親父おやぢが身延山みのぶさんへ参詣さんけいに行つた時にやつぱり雪のたために難なんじふ渋じふして木の下で夜よを明あかしたとのことだがお祖師そしさま様の罰ばちでもあつてゐるのかしら、斯かう降ふられては野宿のじゆくでもしなければなるまい、宿屋やどやは此近所このきんじよにはなし、うム向むかうに灯ひが見みえるが人家じんかがあるのだらう。雪を踏ふみ分わけくそれに近ちかよりました○「御免ごめんなさいまし。女「どなたです。○「私わたしは身延山みのぶさんへ参詣さんけいに参まゐつた者ですが、雪のたために難なんじふ渋じふして宿屋やどやもなにもないやうでございます、まことに何どうも御厄介ごやくかいでございませうが今こんばん晩たゞ夜よを明あかす丈だけでよろしうございます、何どうか御厄介ごやくかいになりたいものでござ

いますが、如何いかゞでございませう。女「それはお気の毒さまですね
 え、お入はいんなさいまし、別に御馳走ごちそうと云ふものはありませんが、
 そこは開あきますからお入はいんなさい。○「はい有ありがた難たうございませう。
かさとと笠かさを脱とつて雪ゆきを払はらひ内うちに入はいると、女「囲炉裡いろりに焚火たきびをしてお当あたん
 なさいまし、お困こまんなすつたらう此雪このゆきでは、もう此このちかく近ちかくは辺へ
んび僻んびでございまして御馳走ごちそうするものもございませぬ。○「何どういた
 しましてお蔭かげ様さまで助かりましてございませぬ。女「そこに木きの葉は
 がありますよ、焚付たきつけがありますから。囲炉裡いろりの中に枯木かれきを入いれ
 フーツと吹ふくとどつと燃もえ上ありました。その火の光りでごこゝに居を
 ります女を見ると、年頃としごろは三十二三服装なりは茶弁慶ちやべんけいの上田うへだの薄うす
どてら襦どてら袍ぽうを被きて居をりまして、頭髪つむりは結むすびがみがみでございまして、目めも

とに愛嬌あいけうのある仇めいた女ですが、何うしたことか咽喉のどから頬ほへかけて突ついた様な傷やうきずがございます。女「そこへ草鞋わらぢを踏ふ込んでお当あたんなさいまし。○「有難ありがたうございます……お内儀かみさんえ、
 まちが間違まちがつたら御免ごめんなすつて下さいまし、人違ひとちがひと云いふことはござ
 いますから、あなたはお言葉の御様子ごやうすでは此この鰻かじかぎ沢ざのお生うまれ
 ではないやうでございますな。女「さうですよ、江戸えどで生うまれたん
 ですよ。○「江戸えどは何どの辺へんでございますか。女「生うまれは日本橋にほんばし
 の近所きんじよですが観音くわんおんさま様のうしろに長い間まゐたことがありますよ。
 ○「へえ観音くわんおんさま様のうしろに……あなたは吉原よしはらの熊蔵丸屋くまざうまるや
 の月の戸華魁とおいらんぢやアございませんか。女「おや何どうしてわたし
 を御存知ごぞんちです。男「華魁おいらんですかどうもまことにお見受みうけ申まうした

お方かただと存ぞんじましたが、只ただ今はお一人ですか。女「いえ配偶者つれあひがあるんですよ。男「左様さやうでございますか、私は久ひさしい以前いぜん二にの酉とりの時に一人ひとり伴つれがあつて丸屋まるやに上あがり、あなたが出て下くだすつて親切まろやにして下くだすつた、翌よくねん年のやはり二にの酉とりの時に久ひさし振ぶりで丸屋まるやへ上あがると、あなたは情しんぢゆう死いなすつたと云いふことで、あゝ飛とんだことをした、いゝ華魁おいらんであつたが惜をしいことをしてしまつた、それからあなたぞくみやうの俗と名つぎ月の戸華魁とおいらんと書いて毎日線香せんかうを上げあて居をりますが夢やうの様やうでございます。女「実じつはね情しんぢゆう死いを為しそこなひました、相手あひては本ほん町ちやうの薬屋くすりやの息子こさんで、二人とも助たすかりまして品川溜しながはだめへ預あづけられて、すんでに女太夫をんなたいふに出とこる処ところをいゝあんばいに切きり抜ぬけてこゝに來きてゐますが。男「左様さやうでござ

いますか、今日は旦那は。女「商あきなひに行いつて留守るすでございませぬ。
 男「何なんの御商売ごしやうばいでございませぬ。女「是これと云いふ職しよくはありませぬ
 が薬屋くすりやの息子こしらでございませぬから、熊くまの膏藥かうやくを練ねることを知しつ
 て居をりますから、膏藥かうやくを拵こしらへて山越やまごえをしてあつち此方こつちを売うつ
 てゐるのでございませぬ。男「へえー芝居しばゐにありさうですな、河かはた
 竹新七けしんさんでも書きさうな狂言きやうげん言いだ、亀裂輝ひあかぎれかくを隠かくさう為ために
 亭主ていしゆは熊くまの膏藥かうやく売り、イヤもう何処どこで何どう云いふ方かたにお目めにかゝ
 るか知しれませぬ。いくらか遣やらうとしたが小出こだしの財布さいふにお錢あしが
 ありませんから紺縮緬こんちりめんの胴卷どうまきの中から出でしたは三両りやう、○「お
 内儀かみさんまことに失礼しつれいでございませぬが、何かお土産みやげと云いつた処ところ
 で斯かう云いふ仕儀しぎでございませぬから、御主人ごしゆじんがお歸かへりになつたら

ひとくちど
 一口何うぞ上げて下さいまし。女「すみませんねこんな御心配
 をなすつては、あなたお酒は上りますか。○「些し位はいたゞき
 ます。女「こゝは田舎でいやな香がありますか。玉子酒にすると
 その香を消すさうでございませう、それに暖つて宜うございませう。
 爛鍋を囲炉裡にかけて玉子を二ツ三ツポン／＼と中に入れまし
 たが早速玉子酒が出来ました。女「此湯呑でお上んなさい
 まし、お酌をしませう。○「久し振りであなたにお目にかゝつて
 そのお酌で頂くのはお祖師様の引き合せでございませう、イエた
 んとは頂きませせん。女「さぞくたびれたでございませう、此次
 の座敷はきたなくつて狭うございませう、蒲団の皮も取り替へた
 ばかりでまだ垢もたんと附きませんから、緩くりお休みなさいま

し、それに以前吉原で一遍でもあなたの所へ出たことがある
 んですから、良人うちのひとに知れると悋気りんきではありませんが、厭いやな顔
 でもされるとあなたも御迷惑ごめいわくでございませうから内々なにくで。○
 「へえーいえもうやきもちを焼やかれる雁首がんくびでもありませんが、
 人情にんじやうでございますから、まるつきり見ず知らずで御厄介ごやくかいに
 なります。女「お休みなさいまし。○「それでは御免下ごめんください。次つぎ
 の間まに行く。あとに女をんなは亭主ていしゆが帰かへつて来たきならば飲のませようと
 思おもつて買かつて置おいた酒さけをお客きやくに飲のましてしまつたのですから、買
 つて置おかうと糸立いとだてを巻まいて手拭てぬぐひを冠かむり、藁雪わらかんじき沓はを穿はきまし
 て徳利とくりを持もつて出いかけました。入いれ替かつて帰かへつて来きたのは熊くまの膏か
 薬うやくの伝次郎でんじらう、やち草ぐさで編あんだ笠かさを冠かむり狸たぬきの毛皮けがはの袖そでなしを被き

て、糧切まぎりは藤ふぢらづるで鞆さやが出来できてゐる。これを腰こしにぶらさげ熊くまの膏か

うやく藥はの入はいつた箱はを斜はすに背せ負おひ鉄てつ雪かんじき沓はを穿はいて、伝は「オイおくま、

オイおくまくまどこへ行いつたんだな、おくま、手水場てうづばか、めつぽふけえ

ふ降りふやアがる、焚火たきびをしたまゝ居ゐねえが今いま頃ころどこへ行いつたのだ

らう、女にようばう房はは堅氣かたぎにかぎると云いふが、あんな女をんなを嗅かアにする

と三年ふさくの不作まはだ。し合羽がつばに笠かさを脱ぬいで壁かべにかけ、伝は「何なんだ玉た

まごさけ子酒をして食くひやがつて、亭主ていしゆは山越やまごえをして方はう々／＼商あきなひを

してゐるに、嬢かアは玉子酒たまごさけをして食くらやアがる、まだあまつてゐ

るが飲のんでやれ、オイ誰だれだおくまか、どこへ行いつたんだ。女は「ち

よつと徳利とくりを取とつておくれ雪かんじき沓を踏ふみ込こんで……紐ひもが切れたん

だよ。伝は「いろんな事をい云いつてやアがる、待まてく、ウームア、

痛いウム、オイお熊軀くまからだぢゆう 中なしびれて……こつちへ入はいつて背中せなかを
 二ツ三ツ叩たたいてくれ。女おんな「何どうしたんだな、しやうがねえな、方は
う／＼々へ行いつて酒さけを飲のむからそんなことになるんだな。伝つと「飲のみや
 アしねえ、今日けふは治衛門ぢゑもんさんのところへ行いつても酒さけは飲のまなかつ
 た、家うちに買かつてあるのを知しつてゐるから。女おんな「それでも酒さけくさい
 よ。伝つと「爛鍋かなべに玉子酒たまござけがあつたからそれを飲のんだ。女おんな「エツ、
 玉子酒たまござけを飲のんだの……しやうがねえな、これはいけねえんだよ、
 お前まへが拵こしらへた麻痺薬しびれぐすりが入はいつてゐるんだよ。伝つと「ウム、おくま
 てめえは己おれを殺ころす了れうけん簡かんか。熊くま「何をなに云いふんだな、さつき身延みのぶさ
 山さんへお参まゐりに来きた人が道みちに迷まよつて此処こゝに来きたが、それは吉原よしはら
 にゐた時ときに出でた客きやくなんだよ、三両包りやうづんで出でしたが跡あとに切餅きりもち（二

十五両包（りぢぢみ）二俵位（へぢらゐ）はある様子（やうす）、それで玉子酒（たまごぎけ）に仕掛（しかけ）をして飲（の）ま

したが、その残（のこり）をお前（まへ）が飲（の）んだのさ。これを次（つぎ）の間（ま）で聞いた客（きやく）は

驚（おどろ）いて逃（に）げようとしたが毒（どく）がまはつて（からだ） 軀（からだ）が自由（じゆう）になりません。○

「太（ち）い女（に）だ、ひどい奴（やつ）があるもんだ、どうかしてもう一度江（え）戸（ど）の

土（つち）を踏（ふ）み、女（に）房（ぼう）子（こ）に会（あ）つて死（し）にたいものだ、お祖（そ）師（し）様（さま）の罰（ばち）で

も当（あた）つたのかしら。逃（に）げ様（やう）として軀（からだ）を戸（と）に当（あ）てたから外（は）れると戸（と）

と共に庭（にわ）にころがり落（お）ちたが、○「南（な）無（む）妙（めう）法（ほ）蓮（れん）華（げ）経（きやう）、妙（めう）法（ほ）蓮（れん）

華（げ）経（きやう）。とお題（だい）目（もく）を唱（とな）へながら雪（ゆき）の中（なか）に這（は）ひました。その時（とき）つ

い氣（いき）のついたは小（こ）むろ山（さん）から頂（いた）いて来（き）た毒（どく）消（け）の御（ご）封（ふう）、これ幸（さい）ひ

と懐（ふと）中（ちゆう）に手（て）を入（い）れましたが包（つ）みのまゝ口（くち）へ入（い）れて雪（ゆき）をつかんで

入（い）れて吞（の）みました（が）、毒（どく）消（け）の御（ご）利益（りやく）か、いゝあんばい（に）軀（からだ）が利（き）

いて来きました、斯かうなると慾よくが出てまた上あがつて包つみを斜はすに背負せおひ道だ
うちゆうざし
 中ちゆう差ざしをさして逃にげ出でしました。女に「野郎やらう氣きがついたな、鉄てつ
う砲ぱうで射ぶち殺ころしてしまふ。これを聞きいていよく驚おどき雪ゆきの中なかを逃に
 げたがあとからおくまは火繩筒ひなはづを持つて追おつて来きます。旅りょの人ひと
 はうしろをふり向むくとチラら火ひが見みえる。前まへは東海とうかい道だう岩いは淵ぶち
おとへ落おす急き流りう、しかもここは釜かまが淵ぶちと申まうす難なん所じよでございます。
そしお祖そ師しが身み延のぶへ参さん詣けいに來きても鰻かじ沢かざは
 やつた、しかしここより外ほかに遁のがれるところはない鉄てつ砲ぱうで射ぶち殺ころ
 されるかそれとも助たすかるか一いっかばちか○「南無なむ妙めう法ほふ蓮れん華げ經きやう」と
だいお題だい目もくをとなへながら流ながれをのぞんで飛とび込こみました。下したにつ
 ないであつた山やま筏いかだの上うへへ落おちると、佩さしてみた道だう中ちゆう差ざしが

かりしは、めうほふれんげきやう妙法蓮華經の七字より、一時おとに落す釜ケ淵かまふち、矢
 を射いる水より鉄砲てつぱうの肩を擦こすつてドツサリと、岩間いはまに響ひびく強つよく
すり薬、名なも月つきの輪わのおくまとは、食くひ詰つめもの詰つめ者と白浪しらなみの深たき企
あたみに当あたりしは後のちの話の種たねケ島しま、危あぶないことで……(ドン／＼／
 激はげしき水音みづおと) あつたよなア——これでまづ今こんばん晩ばんはこ
 れぎり——。」

(一朝口演、浪上義三郎氏筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鯉沢雪の夜嘯（小室山の御封、玉子酒、熊の膏藥）
三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>